

現存のリグヴェーダには、テキストの読みにも編集の手が加えられている。6.5で実例を紹介するが、例えば、4詩行(a-d)からなる韻律の場合に、2詩行毎に纏められ、aとb、cとdの間には、本来考えられない「続け読み」の操作が加えられている。iy, uvはy, vに圧縮されている。例えば、「太陽光」を意味する *sūvar-* という語は一貫して *svār-* と伝承されている。韻律上も語史的にも *pavākā-* 「清らかな」である語は *pāvākā-* と伝承されている(他のヴェーダ文献にも踏襲されている)、などなど。これら、もとのテキストには考えられない現象は、例外なく貫徹されており、編集者の固定と、学習上の堅持とを示唆する。これらテキストの読みの固定も、リグヴェーダ全10巻の編集と同時、或いは、同じ頃に成されたものと考えるのが自然であろう。

6.2 伝承 1に触れた通り、文字の導入は為されず、ヴェーダの伝承は口頭に依った。ヴェーダのことは正しく発語された時にその力が発現するものであるから、伝承された形は実際の発語形、即ち「続け読み」で固定されていた。例えば、「他ならぬ自分自身によって自分自身を確保することになる」という文があるとすると、現代の我々の「正書法」によれば、書かれた英語のように、*ātmanā eva ātmānam avarunddhe* (アートマナー、エーヴァ、アートマーナム、アヴァルンデー) と4語からなる文を想定する。ヴェーダの伝承は、それが実際に続けて発音された時の形を「正書法」に採っている：*ātmanāvātmānamavaruddhe* (アートマナイヴァートマーナマヴァルンデー)。これにアクセント(高低アクセント)が絡み、問題を複雑にするが、今は省略する。

リグヴェーダの歴史で、次に為された特筆すべき作業は、この「続け読み」のテキストを単語に区切る作業であった。これを行った「最初の文献学者」はシャーカリヤという名で伝えられている。ここに、リグヴェーダの「続き読みテキスト」(サンヒターパータ)と「単語テキスト」(パダパータ)とが完成した。シャーカリヤの年代は不明であるが、ヴェーダの付属文献やアーラニヤカ文献では確実に知られていた。オルデンベルク(Prolgeomena 380f.)はブラーフマナの末期あたりを想定している。「続け読みテキスト」と「単語読みテキスト」との間には共通の傾向が見られるが、また、言語理解の差を示す点もあることから、妥当な作業仮説と思われる。また、この問題はアウグメントを語頭にもつ動詞形が母音の後に続く場合の音結合を

どう理解すべきかという問題と関係するので、同様の結論を示唆する K. Hoffmann, *Der Injunktiv im Veda* (1967) pp.146ff. の所見は貴重である。他に「単語読みテキスト」を伝承しているヴェーダとしてはアタルヴァヴェーダ、マイトラーヤニー サンヒター、タイッティリーヤ・サンヒターがある。

ここに、リグヴェーダのテキストには二つの異なった「読み方」のヴァージョンが得られた。リグヴェーダの伝承者たちはこれから更に一步を進めた。単語の順序を並べ替えたり、繰り返したりして唱え、もとのテキストの読みを失わない工夫である。最も簡単な方法はクラマパータ「順番読み」である。分けられた単語を順に1, 2, 3, 4…とすると、12, 23, 34, 45, …と唱えるものである。1と2等の単語の間には続け読みの規則が適用される。そのような規則は「ブラーティシャーキャ」(→5)が定めるところとなった。次に複雑な暗唱の仕方は、12, 22, 21, 11, 12, 13, 33, 32, 22, 23, 34, …と唱える「5つの結合」である。よく用いられるジャター「結び上げ髪」は：122112, 233223, 344334, …である。離れた位置にある単語と組み合わせたり、戻ったりを繰り返す複雑な読み方が多数あるが、そのテキストを見ても原理が解らない程込み入っている。これらの諸ヴァージョンを暗記していれば、霊力をもった「続け読みテキスト」は錯誤による変更からは完全に護られて還元できる。ヴェーダ期を越える時代、あるいはブッダの活動期ころからはヴェーダのマントラの言語、特に古風なリグヴェーダの言語は理解し難くなっただけに、改変の危険はなかったであろう。問題は、せいぜい、パダパータの解釈の影響がテキストの伝承に影響し得たかという点に留まるが、6.5「研究の実際」に見るように、原典理解にとっては二次的な問題である。アクセントも正確に伝えられた。興奮から複合語のアクセント位置を取り違えてマントラを唱えたため、意味が変わってしまい、困難を呼び込んだ話が、既にブラーフマナに語られているほどである。実際の学習では、師(父)が弟子(子)の後ろに立って頭を抑え、弟子の頭を車のギヤチェンジのように動かして、体によって高-低-降下のアクセントを習得させる。上記の、単語の順を入れ替えた特殊な読みに於いても同じであり、アクセントも組み合わせにより変化することが、かえってコントロールの役目を果たしている。

ヴェーダ語の時代が終わり、シュラウターストラ等が作成される時代以後になって、索引が作られた。索

引は各讃歌ないし詩節の作者名、韻律名、捧げられる神格名からなり、リグヴェーダのそれはシャウナカ作と伝えられる。作者索引は時に思いがけない情報を与えてくれることがある。文法規範を逸脱した語形や、独特な言い回しが、ある特定の詩人の周囲に集中する現象などが見られるからである。このことは、索引が伝承を背景に作成されたことを物語る。ヴェーダ文献自体の中にも、作者が挙げられ、因縁譚が語られることがある。

[本報告を作成中に、H. Scharfe: *Education in Ancient India* (HdO, Leiden 2002) を入手した。ヴェーダの伝承、学習などについても解説が為されており、有意義に思われる。]

6.3 伝統的解釈 リグヴェーダ、その他の祭式用詩句(マントラ)には神学議論を収めた「ブラーフマナ」文献(→3)において、祭式の意義(マントラの効力)を確認・実証する目的で、しばしば語釈や解釈が加えられている。散文による議論の文自体も、後の議論の中で論じられたり、論拠として用いられることがある。あるいは、他派に引用され、論拠を挙げて否定されることもある。これらはあくまで神学的議論であり、それ自身としての価値は別として、原典の本文そのものの理解・研究にとっては二次的な意味しか持たない。

ヴェーダに収録された文は、それだけで権威、論拠となるとされたこともあり、後の文献に於いて、ヴェーダ文献の圏外で引用されたり注解されたりすることがある。例えば、リグヴェーダIV58,3には「角は4つある。彼には足が3つある。頭は2つ。7つの手が彼にはある。3重に縛られた雄牛は唸り声を挙げている。偉大さの神は死すべき者たちの中に入り込んだ」という謎の歌がある。これには様々な「解答」が捧げられている。ブラーフマナの末期に成立した文献とヤースカ(語源学者)には、祭式の要素と同定する見解が見られる。文法学者のパタンジャリ(前2世紀)は文法のカテゴリーを謂うものと解く。祭式解釈から学派を成したミーマーンサー哲学のクマーリラ(後7世紀初め)は無論祭式学的解釈を示すが、ブラーフマナや祭式学的伝統を引くヤースカとは全く異なる太陽の運行を用いた解釈を提出している。さらに、ニヤーヤ学派のジャヤンタ、14世紀にリグヴェーダの注釈をしたサーヤナ、その他の注釈者たち、現代の研究者に至るまで、様々な解答が呈示されており、興味深い。謎には

予め決まった答えがあったのではなく、その都度、説得力をもった、破綻のない解答ができれば良かったと考えられる点は確認しておく価値がある。リグヴェーダの場合には問題にならないが、伝承がそれほど確実でなかったテキストに明らかに二次的に誤った語形が見られる場合(例えばタイッティリーヤ・アーラニヤカ)、引用しているテキスト(例えばヴェーダーンタ=文法学派のヴァーキヤパディーヤ)も誤った語形を引いている点は、権威聖典としてのヴェーダを考える点で示唆に富む。

リグヴェーダには、インドの注釈が複数伝承されている。その中、最も広範で、かつ精妙な注釈は14世紀南インド(ヴィジャヤナガル王国)にあったサーヤナのものである。弟はマダヴァであり、共に優れた業績を残した。サーヤナに先行する注釈も一部発見されているが、リグヴェーダの理解への興味よりも、他に伝えられていない神話の類を引用する点で興味を引くものである。サーヤナの注は、讃歌の背景への理解(ヤジュルヴェーダ文献、ブラーフマナ等)にも注釈を残した彼の場合は、祭式の場合から注解することが多い)、単語の分析・理解、文脈の説明、バランスのとれた判断力という点でも優れたもので、19世紀のヨーロッパ、特にドイツで起こったヴェーダ文献学も、これを導きとしてなされた。(サンスクリット文法学においては、その役目を、実に紀元前4世紀のパニーニが果たした。)今、事情を詳しく述べる余裕はないが、報告者は、あるヴァルウナ讃歌を解釈した時、もしサーヤナがそのように理解していなかったら、そして、20世紀初めの全訳者ゲルトナーがそれに注意を払っていなかったら、正解の可能性に気付いたのだろうか、と驚いたことがある。リグヴェーダの研究は一語一語の意味と語形を明らかにして進んできたが、未研究の語をとりあえずサーヤナの注を当てはめて訳しておく、ということもあった。そうした語彙が今日まで幾つか残っており、このことに気付かずに、研究者の一致した見解であるかの如く論じる者も跡を絶たない。サーヤナの背景にはヴェーダ解釈学の文献学的(同時に祭式学的。「祭式学派」的ではない)伝統があったはずであるが、辿れる資料は今のところ無いように思われる。ヴェーダ祭式の解釈学を標榜するミーマーンサー学派の解釈学については吉水報告に譲る。

6.4 写本と刊本 現在研究者が依拠する刊本はアウフレヒトによる第2版(1877)である。アウフレヒトはそれ以前に別の体裁で第1版(1861, 1877)を出版している。サーヤナ注を見る場合には現在も欠かせ

ないマクス・ミュラーの出版（1849-1873）も実際の仕事の殆どはアウフレヒトによると言われている。現在ではインドから複数の良心的な刊本が注釈付きで出版されている。これらの刊本が依拠する写本は全て17世紀を中心に、16-19世紀のものである。6.1-6.2に触れた通り、伝承は単一のものであり、写本に読みの違いがあれば、それは逸脱を意味するに過ぎない。ただし、どの刊本にも利用されていない写本にカシミール写本がある。他の伝承と違った環境に伝えられたものであり、年代も古い（13-14世紀と言われている。但し再考の余地あり）。Scheftelowitz, Kashikar が重要な点については報告しているが、より精密に調査する必要があることは確かである。もっとも、本報告者の経験からすると（ドイツにいた時には、この写本の写真版を利用して。文字が小さく苦勞した）、他の写本では区別の付きにくい文字が、文字種が違うことにより区別できることが最大の利点であり（実際解釈に影響を与える例がある）、それ以上の積極的価値は少ないように思える。カシミールの独特の発音の影響がみられること、南インド独特の発音の影響が見られないことなどの特色は、全ていわば自動的な変異形である。この写本は、むしろ、後から挿入された補遺讃歌（キラ：リグヴェーダのアポクリフとよばれる）を編集する際に、基本資料として利用されてきた。

筆写がいつ頃から行われてきたかは不明である。基本的には筆写によって口頭伝承が失われることはなかった。ただし、文献によっては筆写に基づいた誤謬と考えられるものを示すことがある。現在のヴェーダ伝承が、9-10世紀頃北インドで一度筆写され、その時決定された単一の写本を基に修正を受け、再び口頭伝承が続けられた、とする推測が研究者の一部に行われている。写本は一度筆写されると、写本から写本へと書き写される傾向があり、口伝からの照合・検証が為されないことが大いにあり得る。むしろ、権威ある写本が、例えば他の地方からもたらされると、それに基づいて口伝が修正される、という可能性の方が考えられる。次項で触れるように、リグヴェーダの原典研究の場合には、そうした事情によって影響を受けることは事実上無い。ウパニシャッドの場合には、シャンカラ（後8世紀初め）が注釈に用いた原典は、複数の写本であったことが明らかになっている。しかし、シャンカラが注釈したテキストについては、彼が注釈に採用した読み以外は全て破棄され、シャンカラ注の付された読みが今日まで伝わる唯一の伝承となっている。総じて、ヴェーダ文献の伝承は、いずれかの段階で、

単一の権威ある伝承に絞られる過程を経ている。各テキストは、地方による伝承の差を事実上示さない。パイッパラダ派のアタルヴァヴェーダに、カシミールの伝統と（おそらくそこから移植された）オリッサの伝統の二系統があることは、例外的事例である。

6.5 研究の実際　ここで、リグヴェーダの研究者が実際に原典をどう扱うか、ということを見てみたい。先ず、現存する「続け読みテキスト（サンヒターパータ）」の読みをそのまま受け入れる。次に、その詩節ができた当時の姿を再現すべく手を加える。具体的には、詩行に分け、音節数と音節の長短の並び具合をチェックして、韻律に適った姿を復元する。

例えばX72,2の後半(cd)は、ローマ字転写したエディションでは *devānām pūrvyē yugé 'sataḥ sād ajāyata* となっている。意味は「神々の原初の代(世)に於いて、非存在から存在が生まれた」である。8音節2行分にあたり、*devānām pūrvyē yugé* と *'sataḥ sād ajāyata* の2行に分けられる。ともに7音節分しかなく、編集(→6.1)の手が加えられて固定されたことが解る。2音節が1音節に縮められている箇所を捜し、復元する必要がある。先ず、*devānām* 「神々の」の複数所有格語尾中の *-ām* が2音節である例は統計的・文法的に知られているので、この語が計4音節であった可能性がある。もう一つは、所格単数形 *pūrvyē* 「原初の…に於いて」が *pūrvyē* と3音節に読まれる可能性である。この語は他にも用例が多く、全て3音節に読まれている。従って、ここでも *devānām pūrvyē yugé* が本来の形であったと仮定すると、韻律的にも長—長—長、短—長—短—長とごく自然な詩行が得られる。リグヴェーダを編集した権威的教師が *-iya-* を *ya-* に縮めたことは、リグヴェーダの現存テキストに於いては「法則」であり、リグヴェーダ学派の全テキストに当てはまる。

次に何故 *pūrvyē* なのかを歴史的に説明する必要がある。一つの可能性は、長母音+3子音という構造が発音上避けられ、渡りの母音が差し挟まれた、という説明である。しかし、この場合の正解は、語形の歴史的な検討から得られる。ここではイメージを掴んでもらうだけに止めて、簡略な経緯だけを挙げる。イランのアヴェスタ語の語形は *-viya-* からでなければ説明できない形をしており、インドイラン共通時代の語形は実際 *-viya-* であったことが解る。また、語頭の部分について、同じイラン語形との比較から、インドイラ

ン共通時代のこの語形は *prHviya-* (またはその変化形) であり、母音として機能する *r* に喉頭音が連続していたことが解る。これから先は、インドヨーロッパ語の比較言語学の領域に入る。結論的にはヨーロッパの諸言語にも関連語の多い *prh<sub>2</sub>vo-*「前・東にある」という形容詞に、序列、派生などの意味を加える接尾辞 *-ih<sub>2</sub>o-* が付加されてできた本来 3 音節の語であり、リグヴェーダが作られた当時に 3 音節であった筈であると確かめられる。後半の *'sataḥ sád ajāyata* の復元は単純である。リグヴェーダの編集者は、本来続けて読まれたはずのない、詩行と詩行との間に「続け読み」の規則を適用し、前の詩行末の *e* の後で母音 *a* を脱落させた。想定される *ásataḥ* は *sát*「存在しているもの」(be 動詞の現在分詞中性単数主格形。引用中の *sád* はその母音の前での変化形) の否定形に「…から」を表す格語尾がついた形、*ajāyata* は「産まれた」、アクセントがないのは定動詞である為である。

従って、リグヴェーダ詩人の歌った時の姿は *devānām pūrvīyē yugé, ásataḥ sád ajāyata* であったと復元される。さらに、母音 *e* は、この時期にはまだ *ai* であったと思われる。*ásataḥ* の語末は喉頭音に変化しているが、これも編集による加工で、*ásatas sád* と発音されていたであろう。

リグヴェーダの研究史に於いて、文献学的手法によって達成された成果は多い。それらの成果の中には説明が不可能な事柄も多かった。例えば、「人、人々」を意味する *jāna-* という単語がある。この語は韻律上、当然、短—短という構造をもっているが、長—短が求められる箇所にも現れることが知られていた。韻律に基づいた傾向の指摘は、言語史・言語学的な支持なしには力を持たないが、比較的最近の比較言語学の成果により、その理由が明らかとなった。即ち、この語は「(父が子を) 造る」を意味する動詞語根 *jan* からの派生語であるが、今日では、この語根の末尾には、歴史時代の各言語では痕跡を残しただけで消滅した喉頭音(ラリングル)の一つ、無声口蓋音の性格を帯びた *h<sub>1</sub>* がついていたことが明らかとなっている。従って、インドヨーロッパ祖語の段階を反映させると、この語は長(*jan*)—短(*Ha-*) という構造をしていたことになる。リグヴェーダの証拠は、そのような本来の形を詩作に用いることが許容されていたことを示す。リグヴェーダの詩人はそのような「古語」を *metrical licence* として用い得たわけである。このように、純粹のリグヴェーダ文献学の所見が、比較言語学の成果と照合する

現象は他にも多い。このことは、他方、リグヴェーダが、相当に古い段階にまで遡る詩作の伝統に根ざしていることをも示している。

以上の例では、テキストの復元によって翻訳が変わることは殆どない。しかし、難解なテキストであるリグヴェーダの場合には、上記のような作業を一つ一つ積み重ねて元のテキストに立ち返り、それを基に翻訳し、解釈を試みることによって、初めて納得のいく理解に達することも多い。また、解釈が元のテキストの再吟味を促すことも普通のことである。テキスト批判と翻訳、そして解釈は、常に相互に関連しており、それぞれが独立した分野としては成り立たない。リグヴェーダの普及に資するような訳が出版できない事情もその点にある。また、このような、これまでに積み重ねられてきた作業の経験は、編集・固定された「続け読みテキスト」が信頼のおけるものであることを示し、研究の基礎に置くことを正当化している。

このように、リグヴェーダ文献学は、言語学的方法と、文献学的方法との有機的な結合の中で行われている。この事情は、西洋古典学に於いても、後の文献を対象とするインド学に於いても、本来は同じであるが、そうした分野では困難が顕在化しにくいだけかも知れない。古典文献の研究の源泉・基礎は、常に言語を正面から分析しつつ行われる文献学的営為の中に求められる。リグヴェーダ研究の場合には、それなしには一歩も進まない事情がある。このような三位一体の文献学に於いて、現実に道具となるのは、先ず第一に文法分野において達成された研究成果である。最近のリグヴェーダ研究は、事実上インドヨーロッパ語比較言語学というディスイプリンの中で成し遂げられた成果による部分が大きい。その意味で、今日のインド学が、この方面の訓練を捨てつつあるように見えることは、危惧される現象である。比較言語学の方にも、広い分野を扱う制約から、インド研究に力を割くことには限界があり、拡散の危険がある。今後は既成の学問分野を越えて、目的に合った連携が必須とされる。

所謂「解釈」は、これらの文献学的作業に基づいて、原典の内容が正確に把握され、提供された上で成り立つ営みである。他方また、解釈に基づいて、その都度原典に立ち戻って検討することが必要となり、原典理解と解釈とは相互検証によって進められるべき性格のものである。

## 7 展望「古典学の再構築」

以上、特にリグヴェーダ研究のハードウェアに重点を置いて報告したが、リグヴェーダをはじめとするヴェーダ文献が人類の知的遺産である理由は、その内容の重要性にもある。そのことは、時代の古さと文献の量、その伝承の信頼性からも既に期待されるところである。「ヴェーダの祭式は、宇宙の理法（リタ）に関する知識に基き、言葉の力によって自然界・人間界を操作するメカニズムと捕らえられる」と冒頭に記したが、そのような言葉の集積がヴェーダである。従って、ヴェーダは、古い時代の宗教、思想、風習、制度、技術などについて情報を得る為の宝庫である。ヴェーダの宗教や思想についての研究が、特に19世紀から20世紀の初めに懸けて宗教研究や宗教学研究の方法論に果たした役割は、言語学に対するそれに比べられる。その後、ヴェーダ研究は、あまり研究者の圏内から外へ向かって発信してこなかったように思われる。しかし、まさしくその期間こそが、新たなヴェーダ研究の基礎が準備された時期に当たる。解りやすく言えば、ヴェーダ学の現段階は、文法研究を中心として個々の分野で達成されたヴェーダ研究の諸成果が、初めて信頼できるヴェーダの理解を提供できる段階にさしかかった、ということになる。ギリシャ、ローマ、ヨーロッパ、ユダヤ、中国、日本、その他を領域とする文献学古典学の研究成果と照らし合わせることにより、人間の歴史とその価値的評価に向かって、重要な資料を提供できる見込みがある。同時に、人類学、民俗学の報告や考古学がもたらした所見とも照らし合わせることができようし、他の科学の諸領域の助けを借り、またそれらに資料を提供することも求められる。特に、リグヴェーダ研究は古イラン語資料の研究と手を携えて進んできたが、インドイラン共通時代の知的遺産は、そのすぐ西方に位置するメソポタミアやユダヤ教に連なる世界と交流を持った可能性がある。言葉による文化遺産は、インドヨーロッパ語族の遺産として、当然ギリシャや後のヨーロッパの文化に連なる要素を示すが、更なる精密な再検証が必要であるし、この文化圏に属さない資料と対比させる反証のチェックによって始めて、確認が可能となる。また、起源を異にしても、同じような生活環境、生産形態がもたらす共通要素もあろう。こうしたことを一つ一つ確かめてゆくことは、共通の世界史をもつに至った今日、必要な課題であると思われる。また、共通の世界史という軸の中でこそ、それぞれの社会や文化のもつ独自性とその価値とが正当に理解できるようになる。この意味で、ヴェーダ研

究は一層推進されるべきであり、その為には、他の諸領域との相互検証が必要である。しかも、そうした相互検証を可能にするには、同じ文献学者間の次元での共同ではうまく機能しない。異なった専門領域をもつインド学者たちが有意義に意見を交換する為には、インド学以外の文献学者と一緒に議論する必要がある。同様に、諸領域の文献学者・古典学者が真に協力する為には、文献学・古典学を越えた次元で、他の専門家と討論を重ねる必要がある。このことも、この4年間に亘って与えられた有意義な機会から本報告者が学んだ重要な成果の一つとして強調しておきたい。

---

## ミーマーンサー学派のテキスト解釈法

吉水 清孝

「ミーマーンサー」(mīmāṃsā)という言葉は、「考える」を意味する動詞 man の意欲活用形から形成された名詞であり、バラモンが種々の大規模祭式を確立した時代のヴェーダ文献、特にヤジュルヴェーダおよびブラーフmana文献の中で、祭式の執行方法について討議考察することの意味で用いられ始めた。ヴェーダ文献の編纂が終了した後、ヴェーダ祭式と日常生活を具体的に規定して、後にカルパ・ストトラと総称されることになる補助文献群がヴェーダの流派ごとに作られはじめた。ブラーフmanaの時代には既に、祭式の最後に朗誦するヴェーダの詩句(マントラ)は聖仙・見者が見出した呪力ある言葉であるとする思想があったが、カルパ・ストトラの編纂が進むと共に、詩句以外の部分も含めたヴェーダ文献の全体が、誰によっても作られたものではない永遠の天啓聖典であると見なされるようになった。ここに至って「ミーマーンサー」は、討議考察の対象を祭式から祭式を記述するテキストへと転換し、祭式を記述するテキストが、単語から文章に至るまでの種々の言語レベルにおいて、どのように相互に関連しながらそれぞれの意味を表示する